泌尿器科腹腔鏡手術について

最近 “腹腔鏡”手術という言葉を耳にすることがあるかと思いますが、皆さんご存知でしょうか。“内視鏡”という言葉は馴染みがあることでしょう。胃カメラや大腸カメラなどが良く知られています。腹腔鏡手術とは腹部を大きな管腔に見立てて行う内視鏡手術のことです。

泌尿器科の扱う臓器の中で副腎、腎臓、尿管、膀胱、前立腺といった臓器はもともと開放（開腹）手術を施行してきました。開放手術とは腹部を比較的大きく切開し、広い視野で行う手術のことです。しかし先に挙げた臓器の手術では良好な視野を得られないことがあったり、大きな切開の影響で術後の痛みや、体動を妨げる原因になることもあります。

これに対し腹腔鏡手術では腹部に 1cm 程度の小さな孔（穴）を数ヵ所開け、そこから内視鏡カメラや手術器具を挿入して手術を行います。手術中は腹腔を炭酸ガスで膨らませ、内視鏡カメラの視野で手術を行い、摘出した臓器は最初に開けた小さな孔から外に取り出します。

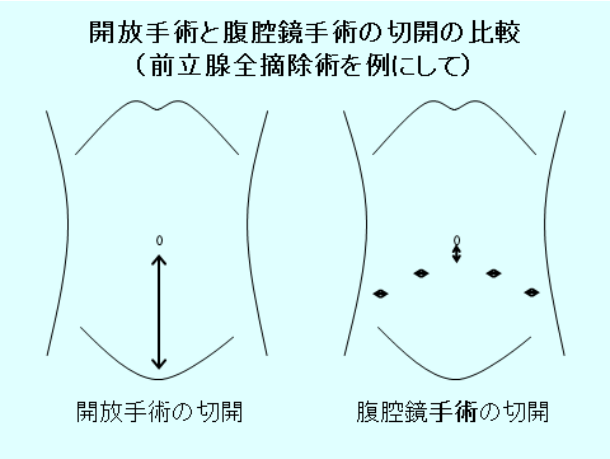
具体的に複腔鏡手術はどういった特徴があるのでしょうか。利点、欠点を挙げてみます。

■利点

- カメラによる拡大された良好な視野で細かく丁寧な手術操作が可能となり、出血量が少ない
- 手術参加者全員がカメラの映像を確認出来るため、手術が円滑に進行出来る
- 皮膚切開が小さく、手術後の痛みが少ない
- 術後の回復が早く、早期退院、早期社会復帰が可能である

■欠点

- 特殊な道具を使用して手術をするため、高度な技術を要する
- 開放手術と比べて、手術時間が長めになることがある
- 使用する炭酸ガスにより、心臓や肺に影響を与えることがある



現在、泌尿器科腹腔鏡手術は腎臓、尿管、前立腺などの悪性腫瘍に対しての臓器摘出手術が良い適応とされています。病気の進行度や患者さんの状況によっては適応にならないこともありますが、今後適応になる割合は確実に増加していきます。また、適応疾患も拡大していく傾向にあります。我々は日々鍛錬し技術を高める努力をし、安全な手術の遂行を心掛けていかなくてはなりません。

【泌尿器科診療部長　上井 崇智】